

# 『立正安国論』を現代に読む

新聞 智 照

宗学者ではない私が、一人の日蓮宗徒として現代社会で生活し、信行し、布教し、平和と人権を守る社会活動にたずさわる立場から、自分の生き方にかかわって『立正安国論』をどう読むかの思いを、この一文に草したい。また「目で読める二千字の立正安国論」をつくってみた。これを末尾にのせて参考に供したい。

## 『立正安国論』とは

『立正安国論』はいうまでもなく、日蓮聖人が三年余の構想ののち撰述、三十九歳、文応元年七月十六日、宿屋入道を通じて前執権北条時頼に奏進した漢文体の書である。別掲の「要旨」のように、主客の九問九答一領解の対話の形で説得的に、論理を進め深めている。論理にも文章にも、見事な筆致を見ることができ、聖人の代表著作の一つである。その主張される内容を一言でいうならば、法然の念仏門をはじめとする、仏教の偏った教えばかりが世に流布していて、他の大乘諸経、中でも釈尊の最も真意を伝える末法救護の『法華経』を忘れ、捨て去っているために、国土を守護する

善神も聖人も国を見捨てて去り、魔や悪鬼が力を得て、それで国中に災難が相ついで起こるのである。やがては国内の叛乱と外国の侵攻が起こり、日本滅亡にもなりかねない。これらのことは諸経に照らして論証できる。だから、今なすべきは、(反論あれば日蓮と対決させ、論議による正邪を決し、日蓮正しくば)即刻、浄土門等の謗法を禁じ、布施することを止め、為政者はじめ民衆が実乗である『法華経』に帰依するならば、十方世界は宝土となり、安穏平和な生活に入れるだろう、というものである。

### 「立正安国」に始まり、終わる

日蓮聖人の御生涯は「立正安国」に始まり「立正安国」に終わる、といわれる。聖人は幼い修学のころより、「何が本当の仏法か」との疑問を持ち、それを解決され「正法を立てる」ことによって開宗されたので、「立正」を離れては聖人のご生涯はあり得ない。そして、正法流布の結果は必然的に「天下泰平国土安穏」をもたらすものであるから、「立正」には、つねに「安国」の主張が表裏一体で存した、といえよう。

『開目抄』『観心本尊抄』をはじめ聖人の著述の多くが、『法華経』が正法である所以を詳しく説き明かす「立正」の書であるのに対し、『法華経』の内容にほとんど触れられていない(数ヶ所の短い引用、勸持品の「悪比丘」・譬喩品と不軽品の「墮地獄」の文等)。「立正安国論」は、文外に「立正」を前提としたうえでの「安国」の書といえよう。

正嘉の大地震をはじめ多発する天災地変に、「仏法は流布しているのに、なぜ国土民衆が平和でないのか」との大きな問題感が『立正安国論』撰述の動機と伝えられるが、この一書を提出して幕府を諫暁されたことから、法難につぐ法難のご一生が引きおこされるのであるから、まことに《「立正安国」に始まる》ご生涯といわねばならぬ。

しかも諫暁三度におよび、ご自身で数回も『立正安国論』を書写され、六十一歳ご入滅直前のご講義が『立正安国論』

であったと伝えられるから、まさに《「立正安国」に終わる》弘教のご生涯であった。

### 私たちの「立正安国」のスローガン

そのような「立正安国」であるから、聖人門下末流として私たちは皆、聖人のご精神、ご遺志を表すスローガンとして「立正安国」をたえず口にしていく。

そうでない人もいよう。かつて幕末、近代宗学の祖と仰がれる優陀那院日輝師は、折伏を否定して摂受中心主義の立場から「立正安国論ハ当時既ニ其ノ用ヲ為サズ、況ンヤ今世ニ至テ全ク其ノ立場ノ無実ヲ見ル」と評し、明治以後の宗門に議論をまき起こすのであるが、その影響を今に受けている人もいよう。あるいは、「佐後」の聖人の宗教体験の深まりに感動共感するあまり、「佐前」である『立正安国論』をあまり評価しない人もいるかもしれない。しかし大多数の宗徒にとつては、「立正安国」は聖人の教えを表す重要な相言葉となつていく、と見てよいであろう。そしてそれが正当と思う。

しかし、その「立正安国」のスローガンにどのような思いをこめ、どのように自分の指針とするかは、人によってかなり異つていくのではないか。それは、自分が具体的にどのような行動して「安国」を実現するのか、考えかたの相違であろう。

戦前——明治から昭和前期の宗徒の多くは、国家主義思想に立つて「安国」を思った。武力による国家防衛どころか、日本から他国への武力侵略も聖戦と観じ、その軍国主義の国策に協力することが「立正安国」にそうと信じた。最後にはスローガンさえ「立正報国」に変えて、「法主国従」の立正安国思想を、「国主法従」に逆転してしまつたのであつた。戦後、このことへの反省は、充分に行われていないように私には思える。戦前ほどひどくないにしても、権力追従や現

実妥協の体質は、かなり残っているのではないか。

今日もっとも多い型は、ノンポリ的な「立正安国」の考えであろう。『立正安国論』には、「戦争反対を叫べ」とも「公害反対運動をせよ」とも「汚職を糾弾せよ」とも「社会福祉にいそしめ」とも説かれていない。「安国」の方策は「誘法禁止」の「立正」のみである。「立正」さえしておれば、いつかは結果として「安国」になる。「お題目を唱えなさい」と布教することが「立正安国」であると。ほぼその通りなのであるが、重大な見落しがある。身を賭して『立正安国論』を幕府に献ずるといふ、諫暁の行動の意味が無視されているのである。

まだ少数派ながら、積極的に「安国」の実現に向かって行動していこうとする実践派がある。もちろん「立正」を前提としてのことであるが、核兵器の異常な発達によって、人類絶滅の危機さえ迫っている「時」を見ては、「国亡び人滅せば仏を誰か崇むべき」（これは「客」の言葉であるが）を国家主義の立場でなく、平和主義に立って危機回避を焦眉の急と見、平和運動への参加を「立正安国」の諫暁の行動の一つと考える立場である。「立正安国」のスローガンを「立正平和」と言いかえて使うことを批判する人もあるようだが、「安国」安世界「平和」の具体的内容としては、反戦平和のみならず、反公害環境保全・反差別人権擁護等の社会活動を含んでいる。

以上、モデルとして三つのタイプを描いてみたが、もとより三分類に納まるのでなく、さまざまの在り方がある。「立正安国」の言葉のもとに、このような考え方の差ができるのは、もちろん一つには各人の修得した世間智の差でもあるけれど、一つには「立正安国」の源である『立正安国論』を、お互い十分に読み深めていないためではないか。「立正安国」のスローガンと『立正安国論』の間に、ズレができてしまっているということであろうか。私たちはもう一度『立正安国論』に立ち戻って、熟読吟味する必要があるようである。

## 現代人のつまづき

十三世紀の日本という「時・国」の中で書かれた『立正安国論』を、二十世紀後半の現代文明世界の中の私たちが読むとき、幾つかのつまづきやすい言葉・思想がある。あるいは、どのように現代に引きくらべるかの問題点もある。思いつくまま列挙してみよう。

①民衆の信仰の在り方が国土環境の災福を現出するという考え方。現代でも個人レベルでは、自分の出会う災福を自分の心の在り方のせいにする傾向をもつ人は多いが、「地震・台風・異常気象等は国民の心が招き寄せるのだ」と主張しても受け容れられない。

②その災福現出のオペレーター（操作技師）は「善神・悪鬼」であるという考え。守護神信仰は現代でも盛んだが、国土・国民のスケールでは①と同じく無視される。もっとも、太平洋戦争末期に「神風が吹いて日本が勝つ」と誤った使われ方をしたのにも、私たちは懲りている。

③悪業の報いで死後地獄におちるという考え。現代では、「心の中に地獄がある」とか「現世に地獄的な体験をする（ただしその場合かならずしも自分の悪業の結果とは考えない）」、あるいは「死後の霊界生活の苦楽は現世のようなものだろう」とは思っても、「死後地獄におちるのが恐ろしい」という感じ方はほとんど無くなっているのではないか。

④「謗法邪教を政府権力で禁じよ」と望むこと。この主張を表面的に読めば、現代の「政教分離」「信教の自由」の思想とかけ離れているように見える。

⑤権力諫暁という政治行為をする。前項と同じで、政治批判や政治への注文など、あまり積極的直接的にすることにはめらいがある。

⑥未来を予言すること。現代でも自分の靈感に自信を持つ人が予言をすることはあるが、あるいは特定の予言書（ノス

トラダムス等)がもてはやされることはあるが、全体としては靈感や聖典による予言には懐疑的である。

これらにつまづく人は『立正安国論』を遠い過去のものと感じ、自分の生き方にかかわって読むことができないであろう。そのことも承知のうえで、つまづいていないつもりとしては、まず『立正安国論』の基本構造から見たい。

### 『立正安国論』の基本構造

釈尊の初転法輪は「四諦」を説かれたと伝えられている。いうまでもなく、

苦—人生の現実の相は苦であることを直視する。

集—その苦の集起の原因を追求すると渴愛が根本原因である。

滅—渴愛を滅すれば苦は滅し平和な境地に至る。

道—苦の滅を実現する道は八正道である。

であるが、この現実直視↓原因追求↓原因滅除↓実行方法という、きわめて合理的な構造が仏教の基本構造であるといえる。

日蓮聖人の教えもまた、この基本構造をもっており、理証・文証・事証を重んじられながら、成仏への道を説かれているのであるが、個人のレベルでなく社会国土のレベルで「苦・集・滅・道」を明らかにされたのが『立正安国論』であらう。

① 現実直視…大災害多発等による民衆の苦しみを直視され、問題とされた。

② 原因追求…経証を中心に原因を追求し、国土に謗法充満のためと見きわめられた。

③原因滅除…謗法を断ち正法を興隆すれば国土は安穩に、民衆は平和を享受できると結論された。

④実行方法…天災のみならず戦争の危機も迫っているので、急がねばならず、全社会的規模での正法受持でなければ防げない。そのためには社会を動かせるトップから動いてほしい、と諫暁された。

私たちもまた、現実の苦しみや危機を直視することから始め、世界の平和を実現する方法を世に諫暁するまでの、この基本構造を『立正安国論』から学ばねばならない。

### 民衆が苦しむ現実からスタート

何よりも心を打つのは、『立正安国論』の問題意識が、目の前の死屍累々とした痛苦の惨状から始まることである。第一問の、対句に対句を重ねた名文の中から、天変地異・飢饉・疫病で民衆が苦しんでいるのを同苦し嘆く、聖人の息づかいが聞えるような巻頭である。民衆の苦しみを他人事と見ておれない熱い心と、社会の現実から目をそむけない強い関心から、「何故だ、なぜこんなことになるのだ、なぜ仏教が救えないのだ」と心痛むゆえの問題提起。私たちもそうありたいと思う。

ふり返って今日の現実を見ると、状況は同じではないか。マイホームの日本にとどこもっておれば、今しばらくは安穩がつづくかに見えるが、ひとにぎりの飽食のかけに三分の二が飢えており、各地に小戦争は絶えず、いつでも全人類を殺せるだけの核兵器が、いつ発射されぬとも限らない。人間らしい神経を持っておれば、心痛まずに生きてゆくことはできない。聖人の時代における「日本」という国土・情報圏・生命連帯圏は、現代では人類地球世界である。私たちも現実直視から出発したい。

## 原因をえぐり出す論証

嘆くだけでは何になろう。宗教者の心で抜苦の救いを念じながら、科学者のような論理的頭脳で、臨床医が病源をつきつめてゆくように、聖人は三年をかけて追求しつづける。近代科学のない時代である。それ故にかえて対症療法でなく、根源的な原因まで論証が深まったのかもしれない。釈尊が苦の原因を無明・渴愛とされたのが、永遠の真理であるごとく、聖人が末法の社会苦（民衆の共同苦）の原因を「邪智謗法」と捉えられたことは、現代にもそのまま通ずる論証である。

ただし聖人の場合、論証の資料は、当時として最高の真理の文献と考えられた大乘經典による文証が中心である。現代では当然、社会苦の原因分析には現代の諸学諸資料を駆使することが、よりいっそう聖人の態度にかなうであろう。そして根源に邪智謗法を見る。

謗法の流布を、聖人はひたすら法然の浄土門に見られた。当時の現状分析である。現代の現状分析は当然異なる。広く深く今日の思想状況の中でとらえねばならない。科学知識技術の悪しき運用（その最たるものが核兵器であるが）こそが邪智であり、生命の尊重、基本的人権の擁護、恒久平和実現の努力等の正しい思考行動に反する、暗い欲望の思考、我欲のために他を犠牲にしてかえりみない行動等の横行こそ謗法であろう。

念のため大急ぎでつけ加えるならば、戦前からあるのだが、社会主義・共産主義こそ現代の謗法なりと、ターゲット（標的）にして論じる人がいる。「宗教は阿片なり」という俗説（それなりの意味はあったのだが）が横行したこともあり、無理からぬことではあるが、現代の思想の多様化の中では、自由主義も社会主義も共産主義もさまざまな様相を見せているのであり、単純素朴に一つの思想体系のみを仇敵のように攻撃していると、かえって現実社会にはびこる金銭至上哲学や学歴偏重他人蹴落とし哲学などが目に入らなくなってしまう。何が謗法かの見きわめが大切である。

## 究極平和理想世界への確信

私たちは毎日のように「一天四海皆帰妙法、末法万年広宣流布」と唱え、また『立正安国論』の第九答のハイライト「汝早く信仰の寸心を改めて速かに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微なく土に破壊なくんば、身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん。此の詞此の言信すべく崇むべし」

のお言葉をそらんじている。けれども本当に、「仏国土」としての究極平和実現の理想世界への確信を持っているのか。ゆるぎない信仰実感としてあるだろうか。

釈尊が苦の原因を滅して寂滅（涅槃）を体得され、さらにすべての衆生が自分と同じく成仏することを確信されたことは、なみなみならぬことであり、それによって私たちは救われている。

日蓮聖人が、社会国土の苦の原因である謗法を断じたならば仏国土が実現する、と断言されるとき、私たちは、あたりまえのことだと読み過ごしてはいけない。国土の成仏、仏国土の顕現、理想平和世界の実現を実感をもって確信することは、容易なことではない。

自分個人の成仏さえ、理念としてはわかっているが、本当に信じ切っているかどうか、あやふやな人も多いのに、まして、国土の成仏、世界平和の実現を信じ切れない人はさらに多い。それゆえにこそ現実を最初からあきらめて、この世は穢土であり、今の世は末法でどうしようもないのだ、というところから、「此土厭離」の浄土信仰が流行したのではなかったか。現代の「此土厭離」は「人類から戦争をなくすことは所詮できない。人間の欲望をなくすことはできなくて、結局どこまで行っても力の関係で支配・被支配がきまるのだ」と、ニヒリズムの裏返し of 卑俗な現実追従主義となっているのである。その思想から軍備拡大競争が生まれている。

一切衆生の成仏を信じ、それが、無限の未来に成仏するまではどこまでも凡夫のかたまりであると考えるのでなくて、現在の本性に仏界を互具しているという成仏が信じられるならば、一見不可能に見える理想平和世界の実現を、自分の論理的結論に選び、自分の生き方にプログラミングすべきであろう。聖人はそのように生きられたのではなかったか。

### 戦争と災害を防ぐための諫暁

上来のべたように、謗法の世から正法の仏国土へのすじ道を説かれることは、「立正」と「安国」のどちらに比重をかけるか論じるとの差はあつても、聖人の諸著作に一貫した論証である。

その中で『立正安国論』の特異さは、平和実現の防災設計をただけでなく、それを政府に献じて実行を迫った「諫暁」の書であるという点であろう。

具体的方策として述べられているのは第八答に、何も謗法者を罪人として処罰せよというのではなく、布施することを止める、いわば特権を与えたり過保護であつたり、政教癒着であつてはならない、とでもいうようなことであろう。現代の日蓮ざらいの悪口家は、『立正安国論』提出は「私の教えを国教にし、私を宗教大臣にしなさい」とでもいうふうな御官運動だ、というであろうが、美田一千町の寄進を断つて身延に入る聖人を見れば、誤解も甚だしいことがわかつた。

ただ、現代の「政教分離・信教の自由」の原則のように、政府は特定の宗教を支持保護してはならないというのではなく、「正法の僧尼を供養し、政府首脳も正法に帰依しなさい」と勧告している。これを現代から読めば、一つには「正法」とは特定の宗派を押しつけるのではなく、「正しい教え・正しい考え方」を大切にせよ、という意味が主であり、二つには、どの教えが正法が明らかにすべきことを言外に求めている。この論文文頭の要約で（一）入りでのべたように、「反論あれば日蓮と対決させ、論議による正邪を決し、日蓮正しくば、『法華経』に帰依せよ」と求めているのであつて、

現代にあつても、学界や論壇で自由公平に発表論争できる機会が与えられていなければ、信教の自由は成り立たない。聖人の真意は「智者に我が義破られずば用いじとなり」（開目抄）であつて、あくまで論理・文証・事実による正邪の判断を第一とされている。

だが、具体的な政策具申が『立正安国論』提出の目的ではない。現状を憂え、原因の構造を分析し、未来への警告（このままでは内乱と戦争が起こる）をし、対策の根本方針のみをのべている。もとより、社会の事象に深い関心を持たれ、仏教以外の典籍に造詣深く、頭脳明敏の聖人のことであるから、求められれば具体的な政策立案の助言をされたかもしれないが、本来の目的は「謗法を禁じ正法に帰依すべし」の根本方針を示す諫暁である。

「諫暁」という言葉は、『現代宗教研究第十三号』の中で近江幸正師が考察しておられるように、仏典に由来する語で、仏より衆生への勸奨というのが第一義であつて、聖人はその第一義に立ち、相手が幕府であるところから第二義的に、臣下が主君を諫正することになぞらえておられる。したがつて「諫暁」は、政策具申の政治行為ではなく、国王を仏法で教導せんとする、すぐれた宗教行為といえよう。ただ『立正安国論』の場合は、縁あつて乞われてする撰受ではなく、大きな危機に際し、衆生の安穩幸福のため（それが終点でなく衆生の成仏が目的）さし迫つた必要にかられて、身を賭して行われた折伏であつた。

この「諫暁」を現代に読めばどうなるか。権力や政治に一定の距離を置き、直言できる姿勢をもつべきであろう。大臣である、国会議員である、大企業主である等の人々に対して親近するばかりで、何の諫暁もしないという既成教団の体質は改めねばならない。同時に、「主権在民」の時代として「国家諫暁」は「国民諫暁」であるから、さまざまな広報媒体を使って広く国民を諫暁しなければならぬし、「国際化・情報化」の時代として、それは「人類諫暁」「現代文明諫暁」が目指されなければならない。

「諫暁」の内容・方法も、ただ「法華経に帰依せよ」と迫るだけでなく、「天下泰平国土安穩」であるための、正法の精神にそった平和への道、社会浄化への道の基本方向を、社会に影響を与えうる方法を選んで発言しつづけることが必要であらう。

### 一 つの例——国連諫暁への旅立ち

日蓮宗では、この「立正安国」の諫暁をめざして、戦後「立正平和運動」が始められたが、現在ではその実際の活動は「立正平和の会」に受けつがれ続けられている。再び宗門あげての「立正平和運動」の復活が必要であるが、そこに至る段階として、現在の「立正平和の会」に注目し、支持し、参加する人の増えることを望みたい。

とりわけ本年（一九八二年）は第二次国連軍縮特別総会がニューヨークで開かれる。国連、つまり各国政府の集りに要請するため、三項目の署名運動を進め、その署名簿を持って代表二十名が国連に向け旅立つことが予定されている。

- 一、核兵器をはじめ、すべての大量破壊兵器の全面禁止と廃絶にただちにとりくむこと。
- 二、第二次軍縮の十年の中で全面完全軍縮を完成する条約を締結すること。
- 三、軍備のための費用を転換して、飢餓と貧困を追放すること。

この三項目に署名して自分の意志を表わし、これを国連に提出すること、このようなことこそ、現代に『立正安国論』を「身」で読む、すぐれた一例ではないであらうか。

文中「現代人のつまづき」の部分をもっと詳しく論じてみたい（善神悪鬼・地獄・予言などを肯定的に）思いがあつたが、果たさなかつた。別の機会に譲りたい。